



PRO-LIFE

胎児を守る運動

中絶に反対する運動

2001年8月 No.130

否定されていく子どもたちの生きる権利

ドイツ連邦憲法裁判所は一九七五年、「よく使われる言葉『妊娠の終結』では、中絶が殺人であるという事実を隠すことは出来ない」とはっきり示した。

アメリカの裁判官達がこの位正直でないのは残念なことである。人々をあやつり、真実を偽るために言葉を使うアメリカでは、この殺人の行為を「選択肢」と呼ぶ。それは、論点を「あなたは、出産と中絶を認める女性の権利を支持しますか、しませんか」という問題すり替える、極悪なたくらみである。だから、本当は子どもを生きる権利が否定されていることが問題なのに、それが女性の自由の問題にすり替えられてしまっている。

もちろん、子宮の中の赤ちゃんに対して以外は、どんな場合でも、人が他人の死を選ぶ権利など認められていない。殺人を、「殺すことを選ぶ権利」とは見ない。人を殺した強盗に対して、「あなたは自分の選ぶ権利を実行したただだから」とは言わない。選択権支持という言葉は、宣伝用語なのである。その言葉が本当に意味しているのは、死の支持であり、殺人の支持である。中絶とは人間を殺すことであり、それ以外の何でもない。

赤ちゃん殺し産業は、赤ちゃんを非人間化し、組織の一片や母親の付属物という言葉で現わす所まで行ってしまった。もちろん赤ちゃんはそのどちらでもない。受精が行われた瞬間から、遺伝子的にも完全な人間が作られ、もしそのままにしておけばどんどん育っていく。受精が行われれば、もうその子どもは母親の身体の一部ではない。その子はただ子宮を使っているだけで、母親が負担しているのは栄養と酸素だけである。一つのいのちだったのが、今は二つになったのである。一つの魂しかなかったのが、今は二つの魂なのである。男と女は精子と卵子を与えるが、いのちを与えるのは神なのである。

この邪悪な胎児殺し産業がもたらす罪のうち、どちらが大きい罪なのか、私はわからない。人間の大量殺人が、それとも人々を現実から引き離し、幻想の霧の中に漂わせてしまう、言葉を使って起こす

狂気か。

とがめられるべきはもちろん、道徳を消し去ってしまった法廷や政治家、そして娯楽やメディア産業である。そして私達もそうである。私達はイエスと言いつつ、赤ちゃんの大量殺人にイエス、ポルノにイエス、暴力にイエス、はなはだしいセックスの宣伝にイエス。私達はノーと言いつつ、このことを知ることで、まだこの悪を正すことが出来る。乱暴な態度にはノー。ポルノにノー。テレビや映画での非道徳的なシーンにもノー。そして最も大切なのは、赤ちゃんの大量殺人とその恐ろしい真実を隠そうとする間違った宣伝行為にノーということである。

国家というものは常に動いている。上向きか下向きか、いつもどちらかに動いている。国家は、駄目になる時は先ず文化や精神面から駄目になっていく。金銭や軍隊は、最後に駄目になるものだが、国民の精神に光がなくなったら、それだつて確実に墮ちていく。国家として今、私達はどこに立っているだろうか？個人としてあなたは今、どこに立っているのだろうか？

オーランド・センチネル新聞、2000年2月1日



心臓の鼓動

心臓の鼓動は、子どもの生命誕生から25日目という、非常に早い時期から始まり、心臓の鼓動が生きていることの本質的要素であるため、人間と非人間の区別をつけるためにこのことを取り上げることが適当だと思ふ人もいでしょう。しかし、生きていることの真の本質的要素は心臓の鼓動の結果生じるものなのです。それは、血の循環であり、身体の別々の部分を養うことなのです。もし身体が他の方法によって養われ、維持されるのであれば、心臓の鼓動は決して生きていることの本質ではなくなるのです。

心臓の鼓動は生命のなじみ深い印ではありませんが、絶対必要な物ではありません。成人でさえも、心肺ポンプによってその働きが補われさえすれば、心臓の鼓動無くしても生き続けられるのです。

機能する心臓は、お腹の中に存在しながら成長する子どもの中で発達するもう一つの要素です。子どもは、受精からまだ日が浅くても、だいぶ日数が経っていても、同じ存在なのです。そこには妊娠期間の長短での本質的な違いはありません。ただ、段階ごとに新たな発達があるのみです。プロ・ライフ

中絶の思い出



親の考え

私は18才の時、オクラホマ市の病院へ行って中絶を受けました。そして今までの2年間の私の人生は悪夢でした。それを全て中絶のせいにすることはできませんが、そのことから全てが始まったのです。これから私があなたにお話することで、私が味わったような苦しみからあなたが逃れることができればと思います。

私がボーイフレンドに妊娠したかも知れないと告げた時、彼は私に向かって、「一体どうしてお前は妊娠なんかしたんだ。ここから出ていけ。もし妊娠したら、自分でどうにかしろと言っただろう。」と叫びました。私は本当に傷つきました。私は医者のところについていてほしかったのですが、彼は拒否しました。

中絶はしないとすると、母は電話をがちゃんと切つてしまいましたが、私は中絶をしてしまつたでは、母に電話をかけることはしませんでした。

中絶クリニックにて

私はその夜、友達のアインと一緒に家庭用の妊娠検査薬を買いに行きました。私は、20分間バスルームに座つて、妊娠なんてしてないというふりをしながら彼女と冗談を言い合つていました。検査の結果が陽性と出た時、私は泣き始めました。

アインと私は、話をしにもう一人の友達のところを訪ねました。彼女は確認のために翌日相談所へ私を連れていってあげると言いました。私は翌日出かけていきました。そこでの検査の結果も陽性でした。相談所で、私は、自分が選ぶことができず、自分が選ぶことができない選択肢についての映画を見ました。映画を見て、私は絶対中絶することはできないと確信しました。私はその夜、母に電話をしました。母は私に、私生児の孫はいらないから中絶の費用を送つてあげるからと言いました。また、母は、「あなたはまだ若すぎるから、子どもを抱えてはどうすることもできないわよ。」と言いました。でも、母が心配していたのは、他人にどう思われるかということだけのようでした。私の気持ちなんかどうでもよかつたのです。私が母に、絶対

見慣れないものがある部屋に連れていかれました。脚をのせる台のある診察台がありました。看護婦は私に服を脱いで、ガウンを着て、診察台に寝るように言つて、ドアを閉めました。

私は今自分が何をしようとしているのかがわかりました。しかし、それは私が望まないことでした。看護婦が戻ってきて、私に注射をし、45分ぐらいたてば目が醒めるだろうと言いました。また、彼女は、目が醒めた時にはけいれんを起こした時のような感じがするでしょうとも言いました。

45分もたたないで、20分で私は目を醒まししました。実際、私はあまりよく覚えていませんが、ただ自分が犯そうとしている過ちに気づき、服を着ようとしたことは覚えていません。冷酷な雰囲気のある医者は、デイヴィッドに私を落ち着かせるように続けました。デイヴィッドに押さえつけられている間に、私はもう一本注射されました。注射器が私の体に刺さった時の感じをいまでもはっきりと覚えています。

中絶後に

苦しみの時がやっと終わって、私は目を醒まししました。デイヴィッドは満面に笑みをたたえ

て私を見下ろして立っていました。最初、私はどうしたのかわかりませんでした。彼は彼なりに私を慰めようとしていましたが、私は怒っていました。私の両足は血だらけで、服も、身につけようとした時に血に染まっていました。

家に帰って、私は母に電話をしました。私が言うことができず、私は、「ママ、もうあのことは心配しなくていいわよ。なんとかしたから。」ということだけでした。そして私は電話を切りました。

デイヴィッドはもう私の人生とは関係がありません。私は中絶したあとすぐに別れました。しかし、依然として中絶は私の人生に関わり続けています。私は悪夢を見て泣き叫びながら目が醒めることがよくあります。私は押さえつけられて身動きができない夢を見ます。時々私は、落ち込みすぎて起きられず、一日中ベッドにただ寝ていることがあります。私はベビー服やおもちゃを買つたりします。実際、私の部屋は赤ちゃん用の小物で一杯です。私はどこに行つても子どもに目が行きます。生きていたら私の赤ちゃんは、その子ども達の誰に似ているだろうかと思つたりします。私は自分の赤ちゃんにターシャ・ドンという名前をつけました。

自由は義務を伴う

私は今も、中絶をした日と同じ罪悪感を感じています。私の思い出は薄れてはいないのです。私は昨日のことよりもあの日のことをよく覚えています。私はお酒や、麻薬を試してみたり、男性とつきあったりしてみました。でも、私が赤ちゃんを失ってしまったことやその思い出を忘れることは、決してないのです。私が中絶をしたことを神様が許して下さったということを知って、今は心の平安を感じてはいますが、その傷跡をなくしてしまふことは決してできないでしょう。

私の伝えたいこと

私はあなたに、人に強いられて、その結果が一生つきまとうような決断をするようなことはしてはならないということだけを言いたいです。というのは、あなたに圧力をかける人達は、あなたに代わって苦しみを背負ってくれることはないからなのです。そのことを考えて下さい。疑問があれば必ず尋ねて下さい。たとえ何才であっても、自分が望んだことをして下さい。そうすれば選択できる道がたくさんあることがわかります。人生は妊娠で終わるものではありません。そこから始まるのです。

「選択の自由」という言葉は、中絶と安楽死を正当化する破壊的な運動のスローガンとしてよく使われるようになりました。中絶支持者は、われわれ反対派が「選択の自由」を侵している」と主張して、その言葉の価値を下げました。この戦略は、長きにわたって効果を発揮してきました。本来高潔で、人類について真剣に考えている多くの人々が、この戦略に惑わされているのです。

彼らは、自由の意味はそれを見る人の内にあるとし、それを奪うことは不正であると考えています。この新しい定義によって、自由とは単なる選択肢となり、選択は欲求や欲望を意味するようになつてしまいました。個人の「自由」を侵すものは、すべて取り除かれるべき不都合なものと見なされます。このような誤った認識のために、生命は贈り物ではなく、脅威とされているのです。ローマ法王ヨハネ・パウロ二世は、「いのちの福音」の中でこう述べています。「人々の心には、行動に、そして法そのものにおいてさえ、人工中絶が広く受け入れられていることは、モラルがきわめて危険な状態にあることを物語っています。基本的な生きる権利すら危機にさらされている現代において、善悪の区別はますます困難になっているのです。」

ひとたび必要悪と認知された中絶は、ありふれた出来事となり、もはや何の説明も要りません。かつて喜びをもって迎えられた子どもの誕生が、今ではキャリアを台無しにし、お金を浪費し、好みのライフスタイルの実現を妨げる不都合な存在としてとらえられています。中絶と同様、安楽死も、個人の生活をより便利にするための選択肢であり、自由であるとされています。法王は私達にこう警告します。「現実の社会では、合理的で人道にかなつていように見ることが、よく考えてみると実は無分別で非人道的であることがあります。そこには『死の文化』の危険な徴候を見ることができません。それは特に豊かな社会において顕著で、効率を最優先する意識と増え続ける高齢者や障害者を面倒なお荷物ととらえる徴候があります。生産性や効率を絶対基準として形成されているこのような社会では、高

齢者や障害者は家族や社会から疎外され、何の価値もないものとして扱われるのです。」このような傾向はアメリカ社会に浸透しており、そのため生命と自由の真の意味があいまいになっています。そこで生命と自由の絆を知ることが重要なのです。「生命と自由のつながりを再構築することが最も大切です。この二つは切り離して考えることができません。一方が侵されれば、結局他方も侵害されることとなります。生命が歓迎されず、愛されていない所では、真の自由はありません。また、自由がなければ生命の豊かさを感じることもできません。この喜びに満ちたメッセージにこそ、惑わされている世の人々は耳を傾け、理解すべきです。自由というものは、選択の際、真実を選ぶという義務を伴うのです。」

それが、選択と自由の異なる点です。選択とは単に選択肢の中から選ぶことですが、自由とは真実を選ぶことなのです。全ての人々、特に、中絶反対派でありながらレイプや近親相姦、母体優先のための例外を認め、安楽死に同情的な人は、このメッ

セージをよく理解する必要があるります。彼らは、おぞましい中絶と、レイプや近親相姦の被害者に加えられた不正への怒りの板ばさみになつていっているのです。また、病んでいいる人や瀕死の人の苦しみを目の当たりにして、延命治療の不当さを感じるかも知れません。その感情は当然のものですが、それに屈してしまうことは生命そのものの意味を否定することになります。「いのちの福音」はこう述べています。「自由が客観的真理から切り離される時、確固たる合理的基盤の上で個人の権利を確立することは不可能になります。そこでは社会は、抑制されることのない個人の意思や、公的権力の抑圧的な全体主義に支配されることになるのです。」

中絶反対者は、選択の自由の本当の意味を考え直す必要があります。我々は生命と自由が持つ真理を公に訴えなければなりません。なぜなら、「どちらの現実も、双方を解きかたく結びつけるもの、つまり愛への使命を本来持っているからです。真の贈り物である愛こそが、生命と自由に本当の意義を与えてくれるのです。」

ノエル・マッケンジー



ただいま」

フェミニストだった
ひとりの人間が、今、
神の御計画に真実と平
和を見いだした。

二、三年前にプロ・ライフ活動に参加するようになるまで、私はフェミニスト活動と中絶賛成運動に費やしました。結局私の中絶に対する考え方が変わった事を思うと、神は、社会問題に対する考えを私にお教え下さるために、あえて回り道をおさせになったのだと思います

過去の人生で、私はずっと自分

自身「プロ・チョイス」を信じていました。中絶を支持しましたし、自ら中絶したことも一度あるほどです。私は、中絶を主張し、避妊をし、その他あらゆる自由主義を唱った不道徳な行為を支持していました。二十四のとき、私は王治医に卵管結紮をしてくれるようお願いもしたことがありましたが。それほど、子どもは絶対欲しいくない、と思っていたのです。結局、手術怖さに思いとどまりました。主治医は、いつか私も子どもが欲しくなるだろうと思っただけです。女性はほとんどそう思うようになるそうです。

若い頃は、結婚と母親になることは女性を縛りつけることだと思っていました。両方とも人生の「真の」使命を果たす機会を女性

ど、フェミニズムの真の姿は束縛であったのです。なぜなら、フェミニズムは女性を洗脳し、男性も子どもも結婚も必要ないと思込ませるものだからです。かつてのフェミニスト仲間達

は、私がどれだけ変わったかを知ると、極端なまでの嫌悪を表すでしょう。彼らが語るところの女性を束縛しているもの全ては、実際は受け入れさえすれば、逆に私達を自由にしてくれるものなのです。夫が家族の柱であるという神のお考えを受け入れられるようになるまで、私達夫婦はいつも競い合っていました。家庭の事を決めるのは自分でお互いに強すぎで、たいてい喧嘩に終わり後味の悪い思いをしていました。

神が夫を家族の柱とお決めになった事実を認めてからは、今までに知らなかった心の安らぎを感じ始め、この12年の結婚生活で我が家に初めて本当の幸せが訪れたような気がします。36歳の現在、私は過去の人生を本当に無駄に過ごしてしまったと思いません。今になって大家族が欲しいと思っても、「プロ・チョイス」を叫んで無駄にした年月のおかげで、年齢的に無理かもしれません。

神は、神が人類にお定めになった聖なる役割を謙遜と忠誠

の心をもって受け入れることで、男性も女性も初めて真の精神的、肉体的幸福を手に入れることができるように定められたのです。国際女性協会 (NOW) に所属している私の知人の女性のほとんどが、同性愛好者であったり、離婚歴があったり、家庭内暴力や性的暴力の被害者であったり、子どもの養育権を争ったりしているのは、決して単なる偶然ではありません。男性や結婚や子どもに対してそれなりの恨みのある女性が NOW の活動にひかれています。

フェミニスト活動は、神が女性に与えられた役割を知らない、またはその役割を誤解している怒りに満ちた傷ついた女性達であふれています。しかし、神は、全ての女性に母性本能と種の保存の精神を吹き込まれています。フェミニズムが何故こうも多くの女性の心をとらえて離さないのか、私自身よくはわかりません。しかし、一九六〇年代のいわゆる「セックス・レボリューション」の行き過ぎたものに違いないようです。当時、女性は結婚もせず子どもも持たないのがよしとされ、男性同様、フリー・セックスを楽しむべきと言われたものです。

残念ながら、真実の愛も結婚もないセックスがどんなものか、私は知っています。そんなセッ

クスと結婚生活の本当の愛とは比べものになるはずもなく、それどころかそんなセックスに関わる人の人間性をおとしめます。避妊はもつと女性をおとしめる行為です。避妊することは、女性に単なるセックスの標的と認めることであり、男性の手招きや呼び出しにいつでも応じると思われても仕方ありません。

中絶が手軽であれば、女性が簡単に「ノー」と言わなくなってきました。おそらく私の人生で一番後悔することといえば、主人が結婚まで禁欲を守ってきたのに対し、私も同じと言えないことでしょう。これは少女少女達が考えもよらないことかもしれませんが、いつの日かこの後悔におそわれることでしょう。

フェミニストと人口検査官は、セックスは軽い気持ちでするものと私達に思い込ませようとしているようですが、真実は、セックスが結婚と結びついているという神のお定めになった人類の使命に従わない限り、自分自身を傷つけるだけです。

この記事のタイトルを「ただいま」にしたのには理由があります。神が私達女性に与えられた役割を素直に受け入れることができて、初めて私は元の自分に戻ったような気がしたからです。フェミニストが、女性を「抑

「4ページから) 吐」すると言っているものすべ
てが、逆に私に自由を与えてく
れたと言つと、おかしなことを
言うものだと思ふ人もいるで
しょう。世間の女性が、神の用意
して下さったものに気づき、神
の御意志のままに道を歩むこと
を、私は望み、祈ります。

男性は本能的に、妻や子ども
を支え、守らなければいけませ
ん。女性もまた本能的に、子ども
を育て、ただ一人の男性に愛さ
れるようにしなければなりません。
男性と女性は、もともと違うよ
うにできていて、どんなにフェ
ミニスト理論を展開しようとも、

その事実を変えようがないので
す。

この記事を読んでいる若い女
性が、私達が誰しも犯しがちな
過ちから何かを学んで欲しい、
それが私の熱烈な望みです。一
九六〇年代と一九七〇年代の
「セックス・レポリーション」
の中で成長した女性達に、そう
感じて欲しいのです。あれは大
嘘だったのです。神が家庭に望
んだものは、真実だけであり、人
間がどんなに抵抗しようとも、
神の定めた道はどこまでも真実
であり、不滅です。望んでいな
かった妊娠や、性病や、良心の呵
責、恥じる思いなど、神の意思に

逆らった結果であり、苦しまず
にはいられないでしょう。

神がお決めになった人類の運
命は、人類の歴史の始まりより
ずっとそこにあつたのです。私
達は、ただそれを受け入れて、そ
うすることで道徳的に正しい行
いをしていくのだと感じ、喜び
と平和を見いだすことができる
のです。

IIIレポート 1995年9月



避妊についての告白

若いころ、カトリックの教えに
ついてあまり興味がなかつた私
には、教えのあちこち分からな
いところがありました。私が分
からなかつた教えの一つは教会
による避妊の禁止でした。それ
が重大な問題であるとはどうし
ても思えなかつたものです。お

そらく、それは米国のカトリッ
ク信者でこの点に関して忠実で
あるのが5%に満たない、とい
う事実によるものだったので
しょう。しかし、教会は常に避妊

が結婚の聖性に反する重大な罪
であると教え続けています。多
数の信者がこの掟に従わな
くても、教会が教えを変更するこ
とはありません。

青年時代

私が通っていたミッションス
クールの高校で宗教の時間に
あつたことを思い出します。あ
る友人がクラスを代表するよう
な形で教師に次の質問をしまし

た。

「先生、先生は私たちが避妊す
ることと、十代の女の子が妊娠
するのとどちらを選びますか？」

「私が望むのは君たちがセック
スなどしないことなんだよ」そ
の教師は答えたものです。

そんな答えは私にもクラスの
みんなにもちゃんちゃらおかし
くて、受け容れがたいものでし
た。だって、それは私たちが出し
た二つの選択肢のどちらでもな
かつたからです。どうせみんな

がそうするのだから、妊娠など
しない方がいいに決まっている
ではありませんか？ このよう
な反応と私たちの質問の仕方を
考察すると、私たちが不道徳な
社会にどっぷり浸っていたこと
がよく分かります。婚前セック
スが悪いことは百も承知してい
るくせに、私たちは罪を犯さな
いことよりも、なぜ罪になる行
為をするとゆるされないのかと
いう議論を教師に吹っかけてい
たのです。

教師を困らせたあの私たちの
質問は次のように言い換えるこ
ともできるでしょう。「私たち
人の家に侵入して泥棒をするこ
とと、黒い服を着ることを望みま
すか？ それとも私たちが十五年
間も牢屋に入っていることを望
みますか？」こんな選択であれ
ば正解などあるわけがありません。
倫理神学者は「罪を犯さな
い」という第三の選択がない限
り、こんな質問には答えること
ができません。

罪を犯すか？ 犯さないか？

それから何年か経って、私は
大学生になっていました。高校
時代のクラスメートがガールフ
レンドを妊娠させました。不幸
なことに、現代、こういうこと
はしょっちゅうあるので、これだ

けではそれほど興味深いこと
でもありません。私があきれて
まったのは、そのカップルが、罪
になるからという理由で避妊を
してはいけないと思っていたこ
とでした。

この事件に対する私の反応は
今考えると恥ずかしい限りです。
直接この二人に向かって言った
わけではありませんが、婚前
セックスが罪であることを指摘
しつつこう言ったものです。「結
婚もしていないのにセックスなん
かすると地獄に行くかもしれない
じゃないか。避妊しないから
この世でももう地獄が始まった
ようなものだ」。

あのころからすると私も年を
取つたものです。見合つただけ
知恵も増していることを希望し
ます。今だったらあんなことは
言いません。しかし、こんな混乱
した考え方にしがみついている
人間が世の中にはまだたくさん
いることに間違いありません。

確かに、あの二人が言つたこ
とは珍妙でした。罪を犯さない
ようにあれほど入念の注意をし
ながら、別のとんでもない罪を
犯してしたわけですから。しか
し、これには案外筋が通ってい
るのかもしれない。未婚の二
人のセックスは罪です。情熱に
突き動かされたかどうかは別問
題で、罪は罪です。避妊すること

資 料 紹 介

(515) (516)

によって、自分たちの性的結合がもたらすかもしれない結果、つまり赤ちゃんを望まないことを認めるのを認めてしまいます。彼らは互いに全面的に結ばれるのに必要な決意がないのに、あたかもそのような決意があるかのように振る舞うのです。

(クリス・モスマイヤー)

[517]

『フマネ・ヴィテ』

適正な産児調節に関する回勅

「人口増加が問題になっていると言われる社会で、教会の『人工避妊は悪』という教えには、夫婦が結婚生活を幸福に送って欲しいという願いが込められています。」

『いのちへのまなざし』

日本カトリック司教団によって書かれたこの本は、いのちを大切に作る社会で私達が生きるために、ちょっと周りに目を向ける時、良い指針を受けることができるでしょう。

定価：300円+郵送料

教皇様によって書かれる回勅は、一般的に、教会内では受け入れられるものだと信徒は考えますが、1968年7月25日に教皇パウロ六世によって書きあげられたこの『フマネ・ヴィテ』は当時の教会の中でも強い反対に合ったと聞かされています。サンパウロ出版の『フマネ・ヴィテ』が絶版になって以来、長い間、私達の目に触れませんでした。今回、再販致しました。特に『いのち』についてメディア(NHKも今年のテーマはいのちと聞いています。)も取り組んでいる今現在、一人でも多くの皆様にご読んでもらいたいです。

本文は大きく三部からなり、第一部は問題の新しい局面と教導職の権能、第二部は教義上の原則、第三部は司牧上の指針となっています。

秘蹟である結婚！私達が、その結婚生活の中で、神の創造の業に協力するものとなる時、まず、何を考えるべきなのでしょう。責任持って『いのち』を育むものとして一度は目を通して欲しい本です。幸い、41ページであまり大きくないので、読みやすいことでしょう。又、定価は300円+送料ですが、皆様へのPRをかねて、250円+送料にしています。なお沢山買っていただいた場合は冊数により、さらに安くしていますので、是非手に取って見て下さい。そして、周りの方々にも渡して下さい。

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの?..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] ティーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] バージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたか..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料
- [306] ミニソフィアAce エース(税別).....7980円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド...(VHS/Beta)....7000 + 郵送料
- [404] いのちーおくりもの.....(VHS)....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS)....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる? 天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [410] ビル先進国・英国からの警告...(VHS)...15000 + 郵送料
- [411] (ユース・セミナー) **エイズ時代の性倫理...(VHS)...**3800 + 郵送料
- [500] (本) 生命問題に関する...(カトリックの教え)...2987 + 郵送料
- [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド)...1000 + 郵送料
- [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ)....660 + 郵送料
- [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本) **赤ちゃん: 最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料**
- [512] 本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513] 本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514] 本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本) **経口避妊薬: ピル.....100 + 郵送料**
- [516] (本) いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料
- [517] (本) **フマネ・ヴィテ.....300 + 郵送料**

[511] 赤ちゃん: 最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬: ピル

| | | |
|-------|----------------|-----------|
| 注文: | 1 - - - - - 5 | 1部 = ¥100 |
| | 6 - - - - - 20 | 1部 = ¥75 |
| フルカラー | 21 - - - 999 | 1部 = ¥50 |
| | 1000 - - 以上 | 1部 = ¥35 |

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

(本) フマネ・ヴィテ

| | |
|--------------|-----------|
| 1 - - - 30 | 1部 = 250円 |
| 31 - - - 100 | 1部 = 200円 |
| 101 - - - 以上 | 1部 = 150円 |

パンフレット申し込み

| | |
|---------------|----------|
| 1 - - - 5 | 1部 = 35円 |
| 6 - - - 100 | 1部 = 25円 |
| 101 - - - 500 | 1部 = 20円 |
| 501 - - - 以上 | 1部 = 15円 |

は自由で
組み合わせ

十代の性

(16)

質問：私は16歳、彼は17歳です。知り合ったのは半年前、つきあつて数ヶ月たちます。女の友達とも遊びたいけれど、週末はいつも彼と一緒にしかたがるので、そつもいきません。彼が嫌がるので、他の男友達とのつきあひもやめました。

デートを重ね、親しくなったら？



答え：つきあつている男女にありがちな過ちは、排他的になりすぎることです。ふたりだけで出かけ、他の人達と行動を共にしなくなりません。人生には本当にたくさん新しい体験が用意されています。特に若いカップルは積極的に他人と接し、互いの人間性を高めあふ事が必要です。

自分の心に従った医師

一九九〇年に、キム・ハーディ博士は交通事故で、二人の子どものうちの一人を失くしました。しかし、どういふわけか、彼は死の中に新しいのちを見つけた。一九八一年に息子のブラッドが生まれたときに、「すぐに中絶反対論者になった」という産婦人科医は、妻のボニーとの結婚生活で人工的な避妊法を使つていました。「ブラッドが死

ぬ前、私は外見上は善良なカトリック教徒でした。妻と私は、避妊に関する教え以外は、教会の教えを全て受け入れました。」息子を失つて、ハーディー家は根本的に自分たちの生活を見直すようになりました。彼らは一九九〇年にすぐ避妊をすることをやめました。それは十一一年間の結婚生活で初めてのことでした。三年のうちに、ハーディ

あなたも彼も、それぞれ友達との交友を深め、相手は興味がないさそうに興味や体験に取り組みのが大切です。

ておかないと、結婚後、本当にふさわしい人を選んだのかどうかすら判断しかねるかもしれません。

あなたぐらゐの年齢の時は、男女を問わずさまざまな人達とつきあう努力をすべきでしょう。自分自身を知り（長所・短所・好き嫌いなど）いろいろな状況に身を置く事も成長につながります。それに、男も女も初めから完璧に生まれてくるわけではなく、それぞれの状況下で他人がどう感じ、判断し、行動するかを観察しながら社交術を身につける必要があります。将来社会に出て仕事する上で、また生涯の伴侶を選ぶ際に、その知識が役立つでしょう。周囲の人間を充分見

十分に大人になるまでは、特定のひとりとつきあわない方が健全でしょう。気が向いたら男の子としゃべったり出かけたたりするのはいいですが、特定の恋人をつくるには問題が多い年齢で、メリットよりもデメリットの方が上回ると思われます。もつと周囲と自由につきあうことをおすすめします。彼に自分の思いをはっきり伝え、彼の望んでいることがあなた自身のためになつていくかどうか冷静に判断するのを恐れてはいけません。

博士は彼の産婦人科医の仕事のうち避妊方法の指示と避妊手術をやめました。彼は、「自然な家族計画（NFP）と彼の産婦人科医としての仕事を支持してくれる、もつと多くのカトリック教徒の住民がいる地域を求めて、一九九四年にルイジアナ州のラファイエットに引っ越しました。四十万人の住民が住む地域で、二ニューオーリンズ生まれの42歳の彼は、千六百人の患者を持ち、一ヶ月に平均17人の赤ん坊を出産させていますが、それはその国のほとんどの産婦人科医よりも多い数です。誰に聞いても、ハーディ博士は避妊薬や避妊具を処方したり、卵管結紮を行なつたりしないアメリカにいる数十人のカトリック教徒の産婦人科医の一人なのです。

「ブラッドの死や、それが私たちにもたらした苦しみのために、私が今までどんなに身勝手だったかを知ることができたのです。子どもが二人いて二人とも生きていけば、すべてが順調なように見えます。しかし、一人を失うと、きつと。我が家にもつと子どもがいればなあ。」とみんな言うのです。」と一九九四年のインタビューのときにハーディ博士は話しました。

一九九二年十二月に、ハーディ博士は今まで通りに医療を行なえないことに気づきました。彼はもはや避妊薬を処方したり卵管結紮の処置が行なえなくなりました。なぜならそれらはセックスの、男女を一つにしいのちを生み出す側面を侵すものだったからです。「九ヶ月間、私はアラバマ州のプロテスタント文化の中でカトリック教徒として手術をしようとした。一九九三年十月までに、私はとても気がめいって、それ以上卵管結紮は行ないませんでした。」ルイジアナ州のラファイエットで「自然な家族計画」を教えているドン・トゥーシェイ、イメルダ・トゥーシェイ夫妻の招きで、ハーディ博士はラファイエットに引っ越しをしました。ラファイエットを本拠地とする「自然な家族計画」の教師であるゲエン・バートランドによれば、ラファ

日本プロ・ライフ・ムーブメント事務所

〒780-0062 高知市新本町一丁目7-3 1

電話/Fax 088-873-3619

e-mail: prolife@i-kochi.or.jp

For English Speaking People /evening: Tel/Fax: 088-843-0406 Email: nvt56n@ps.inforiyoma.or.jp

事務所時間：

| | | | | |
|---|----|-------|---|-------|
| 月 | 金 | 10:00 | — | 17:00 |
| 土 | 曜日 | 休み | | |
| 日 | 曜日 | 休み | | |

会員募集

寄付: 十万円 五万円 三万円

一万円 五千元 一千元

無料: 毎月プロ・ライフ・ニュースレター

あなたの寄付はまだ生まれていない赤ちゃんを守る運動のため使用させて頂いております。私たちと一緒に小さい命を大切に育みましょう。

御送金

銀行：四国銀行朝倉支店

口座番号：0573553

日本プロ・ライフ・ムーブメント

郵便局：「郵便振替」

現在口座番号：01660-5-39607

日本プロ・ライフ・ムーブメント

事務所便り

先日のテレビで、地球温暖化のため、地球全体の温度が1.5度上がるとのこと。9月号の事務所たよりに取り組んでいる今は7月始めなので、この暑さがあと1ヶ月で頂点に行くでしょう。コンピューターの前に座っているだけでも汗がふき出てきます。皆様お元気ですか。どのようにこの暑さを乗り切っていますか。

今日は少し、この運動のことを説明しようと思います。毎月皆様のほうにお送りしているこのプロ・ライフ・ニュースのプロの意味は、『…のために』ということなのでいのちのためにということになります。強食弱肉の世界というのでしょうか、時として、私達が弱いものいのちの上に私達の生活を築こうとする時があります。胎児の中絶や老人の安楽死を取り入れている社会のことです。日本は安楽死はまだ認めていませんが、中絶は長い間認められてきました。そして、これからは経口避妊薬・ピルやモーニングアフターピル（これは避妊薬と言われるけれど、はつきりとした中絶薬）のために母親が知らない間に自分の子どもを中絶してしまつことにもなりかねません。これは恐ろしいことです。私達は、いのちの大切さを説くために中絶の真実を伝え続けてきました。教会、修道院、ミッションスクールへは毎月、公立の中・高等学校と全国の産婦人科医院へはローテーションを組んで送り続けています。皆様が支えて下さっている暖かいお心は大体3分の2位はこのニュースの郵送料に当てられています。残りの3分の1とその他に事務所にある機械の維持や印刷屋さんへの支払、封筒代、事務用品代などにもお金が必要になっていきます。それで今、皆様の寄付をどうか宜しくお願いいたします。

日本プロ・ライフ・ムーブメント

(7ページから)

イエツト司教管区の多くの司祭、特に若手の司祭たちは、避妊に関する教会の教えを積極的に支持しているそうです。

その司教管区の十もの教区において、結婚の準備の一つとして、カップルは少なくとも一回は「自然な家族計画」の講習に出席しなければならぬというプログラムが実施されています。パートランドによると、その地域には、「自然な家族計画」を教えている三十組ものカップルがいるそうです。

カトリック教会は、すべての結婚した夫婦はいつでもそれを受け入れるようにと命じています。そして、「自然な家族計画」は教会が認めている家族計画の一つの方法なのです。いくつかの調査によると、「自然な家族計画」を実行しているのは、カトリック教徒のわずか2%ほどで、妊娠可能年令の夫婦の70%以上が避妊手術を受けたり、避妊をしたりしています。

ハーデイ医師のもとを初めて訪れると、産科の新しい患者は「診療方針」というものを読んでサインをします。それには、「妊娠おめでとう。この病院の目的はいのちを奨励することにありま。あなたの赤ん坊が五体満足だという確率は98%です。何らかの理由で、あなたの妊娠に問題があると決定が下されていても、いかなる理由があっても私たちは中絶を支持することはできません。」と書かれています。さらに、「避妊と中絶の関連により、私たちは避妊

も支持いたしません。」と続いています。彼は、その地方だけでなく全国を、自然な家族計画と人工的な避妊の害について講演して回っています。彼は教会の教えを研究し、それらを理解し信じようになりました。彼は他の医者たちと一緒に仕事をし、彼らが家族に関する教会の教えを受け入れる手助けをしようとしています。

ハーデイ博士は彼の教区の多くのカトリック教徒の間で相変わらず人気があります。多くのプロテスタントの人々も彼のもとにやって来ています。「多くの場合、プロテスタントはカトリック教徒よりも子どもを産むことに對して寛容です。というのは、彼らは聖書の教えにあるように、子どもたちを神から授かったものとして見ているからです。」と、患者に避妊法を教えたり避妊手術をしたりしないまた別の産婦人科医のジョン・ブルガルスキー博士は話しました。

ハーデイ博士が最初自分が信仰している教義を彼の医療方法に組み入れようと決心したとき、彼は自分は患者となりうる人を疎外することになるのではないかと思つたかもしれませぬ。しかし明らかにそんなことはなかったのです。電話のインタビュで彼は、五週先まで予約で埋まっていると答えました。「私にはパートナーがぜひ必要です。働きすぎて参っています。」と彼は話しました。

(ウィリアム・マレー)